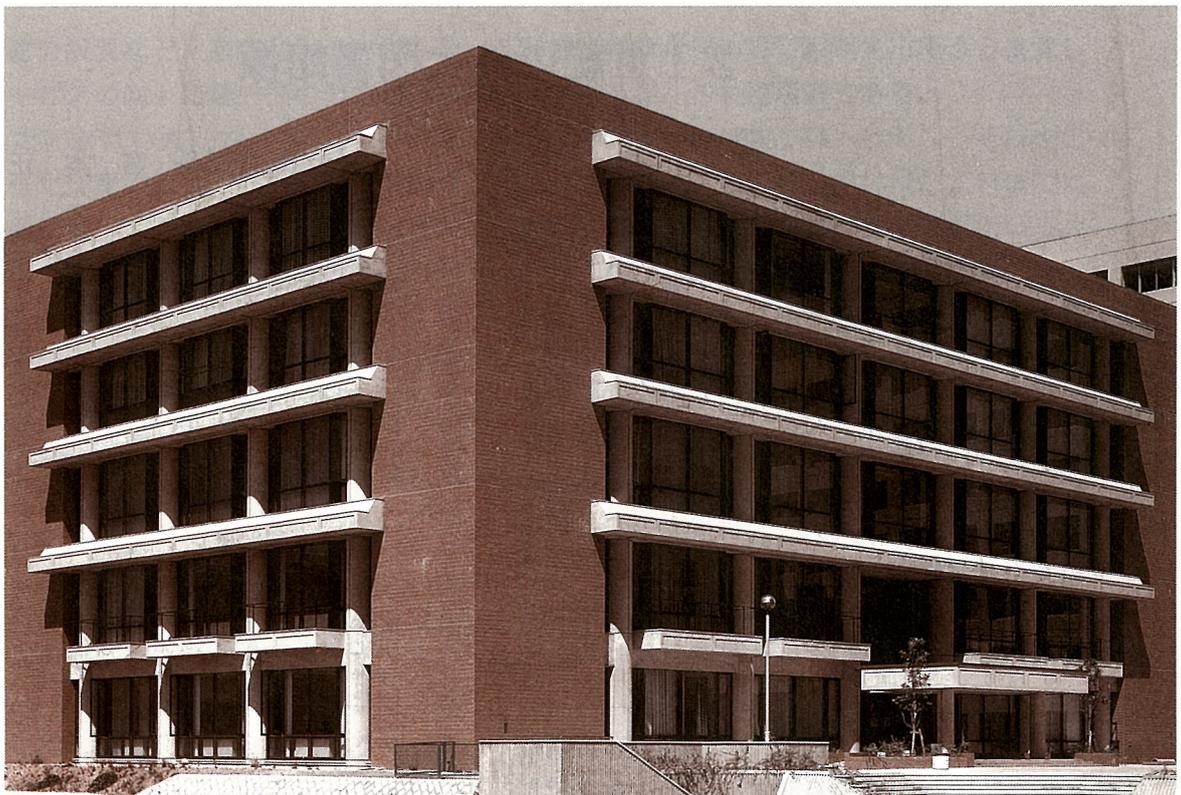


LIBRARY INFORMATION



目次

21世紀の外大図書館像.....	図書館長	宮本正興 (2)
「電子図書館化」に向けて.....	事務長	仲川英雄 (3)
本学所蔵貴重図書『百二十老人語録』について.....	教授	橋本 勝 (7)
マールバッハのシラー図書館.....	助教授	山元孝郎 (8)
閲覧カウンターから.....	運用係	(9)
図書館について思うこと.....	助教授	安生恭子 (12)
時間を翔び立つ翼.....	助教授	筒井佐代 (13)
図書館が「狭く」なっています！.....	図書館増改築検討作業部会	(14)
テープライブラリー・カウンターから.....	視聴覚資料係長	澤山輝彦 (15)
大型コレクションとは.....	整理係長	森垣啓土 (16)
本学関係者からの寄贈図書一覧.....	学術情報係	(18)
編集後記.....	専門員	(20)

大阪外国語大学附属図書館 1997.10.20

LIBRARY INFORMATION 第9号

2 1 世紀の外大図書館像

附属図書館長 宮 本 正 興

10数年前、ロンドン大学東洋アフリカ学院(SOAS)の書庫に入り、英ハイネマン教育図書出版社刊「アフリカ作家シリーズ」に収められた著名なケニア人作家の小説の生原稿を見る機会があった。全文複写を許されるはずもなく、私はその作家の60年代の出世作の自筆原稿を書庫から持ち出して、推敲の筆の跡を細かくメモにしたためた。最終完成原稿に至るまでの作家の想像力の軌跡を辿りたいという抑えがたい欲求にとらわれたのであった。

それから約10年。ノーベル賞の有力候補にもなっていたその作家はイエール大学でアフリカ文学を教えていた。その頃ニューアークのオレンジにある彼の家を訪ねた私は、ある日、彼に同行して鉄道でイエールに向かったことがある。初めて見る広大な緑のキャンパスの一隅に教員宿舎があり、その日私はそこに同宿することになった。

この時、作家は近く英国の出版社から出すという新しい評論集をすでに脱稿しており、その「まえがき」をコンピュータに向かって入力している最中で、私はその文面を画面で見せてもらった。作家は何度か手を入れてから、その日のうちに、原稿をロンドンへ送ってしまった。「ワープロなどを使っているようでは、よい日本語は書けない」とワープロ使用を断固拒否していたという野間宏の言を痛快に思い、機械音痴ゆえの怠慢を決め込んでいた私はすっかり驚いてしまった。いわゆる「想像力の軌跡」は跡形もなく消えてしまったのである。

だが、この程度のことに驚いているべきではなかったのだ。それより以前にも、ヨハネスブルクの名門ウィットウォーターズラント大学アフリカ文学科の一室で、1910年代にプレトリアのスラム街に生まれ、今ではアフ

リカ文学界の最長老ともいえる作家がコンピュータに新しい小説を入力しているのを肩越しにのぞき見たことがあった。亡命生活が30年を超える南ア出身の最長老詩人の場合は、ピッツバーグ大学の研究室をアフリカ文化情報をめぐるインターネットの中枢に仕立てている。

コンピュータを基軸とする情報機器が、これまで予想すら出来なかった通信大革命をもたらしたのである。インターネット、E-mail、データベース、CD-ROM、電子化といった用語が時代のキーワードとなった。氾濫する情報資源をめぐって、その管理、発信と受信、効果的利用、共有のあり方などについて、従来の常識を越えて、否応のない対応を迫られている。

今、全国、いや全世界の図書館(大学図書館だけではない)がこうした変化の大波に洗われている。図書館が、本来、情報の貯蔵庫、情報のサービス機関であるからである。こうした変化に対応して、学術情報センター、情報館、情報資源共同利用センター、電子図書館といった新しい名称が定着し、従来の図書館機能のほとんど全部、または一部を取り込んだ形の、マルチメディア機能を整備した見事な施設もすでに誕生している。

従来の図書という体裁がはたす情報資源としての役割はまだまだ大きく、しかもこんな時代には書籍への愛着が一層増大することも考えられぬではない。とはいえ、私たちの外大図書館がこの情報革命の進行に遅れをとることがあってはならないと思うのである。外大では、先に情報処理室の開設があり、学内LANの整備があった。図書館でも、新規図書のデータベース化、遡及入力、学術情報センターへの登録、入退館システムの導入、自

動貸出装置の設置など、図書利用の一層の効率化、サービスの向上に精一杯の努力がはらわれてきた。とはいえ、21世のマルチメディア、電子化情報の時代に向けて、外大図書館の将来像について全学的な合意が形成されているわけではないし、そのための議論も必ずしも活発とはいえない。それどころか、現実には、未整理なままの特殊言語図書が山積みのみままであるし、本学が世界に誇りうる石濱文庫についても約4000点の貴重文献が未整理のまま放置されている。

外大図書館が積み残した課題と、これからの方策を考えれば、その解決の道は険しうである。このような時期に、仲川事務長の指揮のもと、専門員の岸本さんが中心となって、

図書館の総力をあげて館報を出そうと決意したのである。これは勇断である。

館報がないのは寂しい。しかし、それを出しつづけるのは難しい。聞けば、これまでに二度の中断があり、今号は再々刊だという。小さいながらも、館報発行の努力が継続され、外大図書館と学内外の利用者を結ぶメディアとして広く役立てられることを期待している。そして願わくば、この館報が一つの媒体となって、一層親しまれ、一層時代の要請に応えうるような外大図書館像をめぐって、学内に活発な論議が沸き上がることを期待せずにはおれない。大方のご支援とご協力をお願いする次第である。

「電子図書館化」に向けて

事務長 仲川 英雄

今日の社会は産業構造の高度化と情報通信関連技術の驚異的な変革によって、一気に高度情報化社会に突入したといわれております。そして、そこに生活する私たちの社会は高齢化・高学歴化が進展し、生涯学習社会への道を歩みつつあります。しかしながら、急速な情報環境の変化は情報の氾濫や混乱を招き、ときには人間性も阻害されかねないでしょう。このような社会状況にあって、大学図書館もまた豊かな人間性の回復と社会に開かれた学術情報の核としての変貌を迫られております。知識の創造と同時に良質な学術情報の収集・蓄積・加工・提供・伝達など高度情報化時代に適った利用環境の創出を図ることが求められているのであります。それは「大学図書館が学術研究情報の主要な生産拠点としての大学の活動を支える基盤的施設であると同時に、学術情報の蓄積機能と発信機能の双方を効果的かつ効率的に進める」（平成8年7月学術審議会『大学図書館における電子

図書館的機能の充実・強化について』建議）ことであり、情報サービスの普遍化と情報関連施設の相互協力を強調するものであります。そのためには、大学図書館の諸機能を電子図書館的機能という新しい枠組みで再構築しなければなりません。すでに、複数の大学図書館ではオンライン蔵書目録（OPAC）等の書誌・所蔵データベースに平行して、特別プロジェクトを組織して、電子出版物の作成・編集の試みが積極的になされております。

こうした動きの中で、大学図書館が電子化・情報図書館化への道のりを歩むためには、単に学術情報基盤としてのインフラ（学内LAN、インターネットなどのネットワーク・システム）の整備や情報通信技術の修得だけでなく、業務の内容や組織・機構、予算のあり方、大学及び社会における位置付けなどについて新しい視点からの見直しを行い、個々の大学にあった図書館ビジョンを策定すること

が重要であります。そして、大学が生産・収集・蓄積した学術情報を図書館内での利用だけでなく、インターネットを介して学内外のどこからでも効率的に利用できるような環境づくりが必要であります。以下、本学図書館の「電子化・情報化」に向けての現状と課題について、今回は2点に絞って簡単に紹介しておきます。

1. 学術情報基盤（インフラ）の整備

本学図書館では、昭和60年にオフィス・コンピュータによる図書館システムが導入され、電子化・情報化への第一歩を踏み出しました。その後平成元年、平成6年の二度にわたる更新で、現在はUNIXコンピュータシステムが採用されております。その結果、貸出・返却・検索・発注・受入・目録整理・支払など図書館の主要な業務がすべてコンピュータ化されることとなりました。しかも現在稼働しているUNIXシステムは、柔軟かつ多機能性に富んでいるため、それまでのオフシステムでは自動化できなかった分散処理、オープンシステム、ダウンサイジングなどが可能となり、業務の省力化やネットワーク上のアクセス環境の向上にも役立っております。またこの間、学術情報センター（全国の大学図書館、研究機関、大型計算機センターをコンピュータとデータ通信網で結び学術情報を受信・発信する学術情報システムの中核機関）との接続、学内LANの敷設などがあり、学内外とのネットワーク環境も飛躍的に充実してまいりました。一方、全国に先駆けてBDS（ブック・ディテクションシステム）を設置しましたので、利用者が館内に私物を自由に持ち込めるようになっております。さらに、今年度からブック・ディテクションシステムと連動する入・退館システム及びPSC（図書自動貸出装置）を導入したことによって、特に利用度の高い開架図書8万冊についてはいちいち閲覧カウンターを通さなくとも利用者自身の簡単な貸出処理で自由に借出せるようにもなりました。また、この10月から開館時間の一部延長や文献複写用コピー

機を館内に設置するなど利用者環境の向上に努めております。

しかしながら、未入力資料の遡及入力や電子化資料の充実、アクセス環境を高めるためのOPAC用端末機やCD-ROMサーバの増設、学内LANや外部インターネットとの迅速かつハイレベルな接続環境を保持し、マルチメディア型電子図書館を指向するための高速接続回線の導入など、今後に向けて解決しなければならない多くの課題も抱えております。遡及入力ひとつ取り上げてみても、なお25万件（全蔵書数の45%）に及ぶ未入力資料、特に翻字化を伴うアジア・アフリカの特殊言語図書（約7万8千冊）の遡及入力は、本学の電子化・情報化にとって緊急かつ重要な課題であるにもかかわらず、教育研究特別経費や学内共通経費などの予算措置がほとんど見込めない状況にあります。再三にわたる文部省への特別予算措置の要望についても、他館への貢献率（学術情報センターへのオリジナル登録-共同分担目録システムへの相互協力）の低さが障害となって、いまだ実現に至っておりません。こうした大規模事業は本学だけの悩みではありませんが、他大学の多くが独自の学内プロジェクトを組織して精力的に取り組んでいるのが極めて印象的です。

2. 組織・機構等の再編と人材の確保・育成

学術情報基盤としてのインフラが整備されても、それを支えるべき組織・機構（事務組織、研究組織、支援体制など）や大学のビジョンそのものが軟弱であったり、時代の要請にかなった人材の確保・育成が図られなければ、個々の大学の特色を生かした個性的、先端的、効果的な学術情報の生産・収集・蓄積・加工・提供・発信活動を期待することはできないものと思われます。その意味で、これからの情報インフラの適確な利用拡大のためには、次の4点を特に重視したビジョンの策定と支援体制の構築が不可欠であります。

- ① インターネットへの効果的な対応
- ② マルチメディア型データベース機能

- ③ メディア・クリエイティブ機能
- ④ これらのサービス及び支援機能

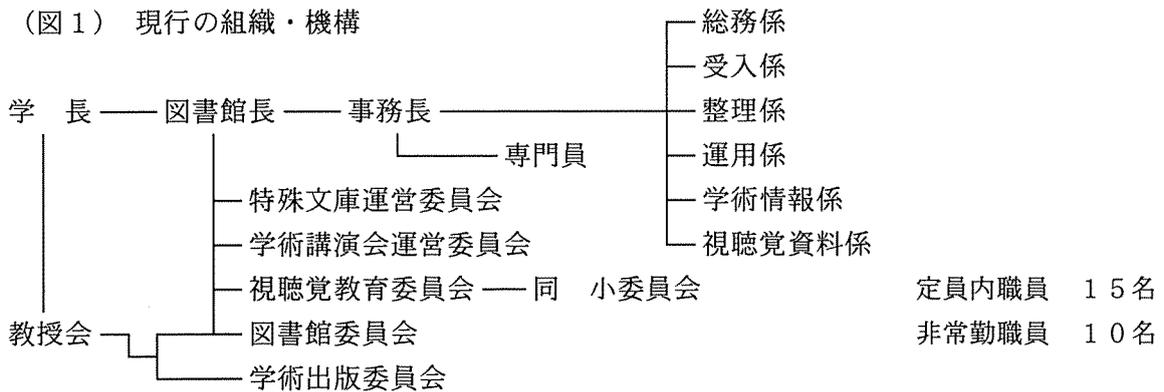
それは、インターネットの効果的な利用を通じて大学自身の蓄積機能と発信機能を高めていくことであり、これまでの文字型データベースに加えて、音声動画情報を可能にするマルチメディア型の電子化・データベース機能が求められていることであり、これらの多様な学術情報の蓄積をいかに効果的な手段で発信していくかということでもあります。そして、さらに重要なことは、こうした新しいシステムを利用者へのレファレンス・サービスや教育・広報活動を通じていかに高めていくかにかかっています。

ところで、本学図書館の基本ビジョンと組織・機構は、昭和52年の将来計画委員会による『学舎移転にともなう附属図書館および語学教育研究施設の建築設計基本要綱』で確定され、昭和54年の学舎統合移転を契機にその骨格ができたものであります。当時とし

てはその適確なビジョンと先見性、ユニーク性において本学の教育研究理念をいかに内外に知らしめるものとして、文部省をはじめ他大学の注目するところでありました。全国に先駆けて図書館と視聴覚教育研究施設の統合を図り、図書の集中管理方式とアカデミック・ゾーンの中核とする基本構想。さらに注目すべきことは、その2年前の昭和50年の図書館構想で、すでに大学間ネットワーク・システムの確立と電子図書館化構想の必然性が強調されていたことであります。20数年前のこの先見性と斬新な本学の発想が、まさに今日における大学図書館の必然的な潮流となりつつあることも改めて認識しておく必要があります。

しかしながら、現行の組織・機構（図1）が具体的な運用面において、前述の4点の機能や本学のビジョンの中で充分機能しているのかといえば、やはり指摘される問題点も多いわけであります。

（図1） 現行の組織・機構



現状は、事務部門、図書館が所管する各種委員会のあり方、関連委員会（情報処理委員会、情報処理室運営委員会など）との連携協力、電子化・情報化に向けての全学的な研究

支援体制などそれぞれに問題を抱えておりません。今回は、紙面の都合もありますので事務部門の問題点と改組計画（図2）について簡単に触れておきたいと思ひます。

（図2） 改組後の組織・機構



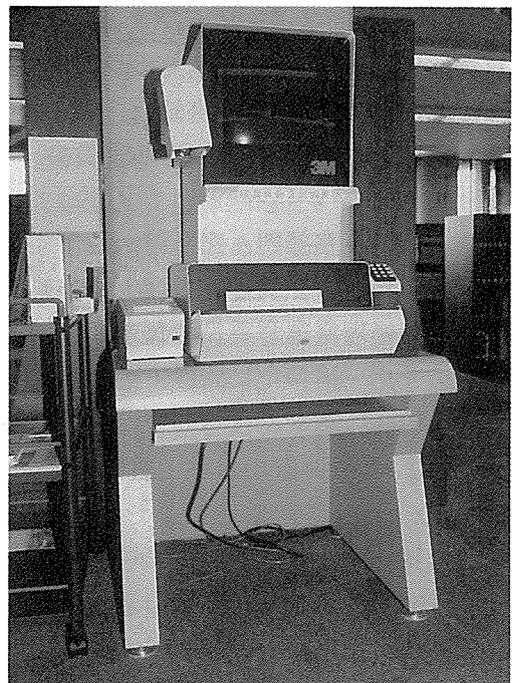
本学の図書館では、事務部門においても多くの問題点を抱えております。専任職員（定員内職員）の高齢化（平均年齢49才）と非常勤職員依存率（40%）が高く、職域の活性化や円滑な世代交代を図るうえで大きな障害となっております。また、こうした状況が電算化システムの運用業務にしても特定の若手職員により多くの負担をかける状況にあります。一方、人事交流は職域定数、職務内容の専門性、高齢化などが足かせとなって、内外の十分な理解が得られず、事務局・学生部への主任・専門職員・専門員制度の積極的な導入が図られる中で、図書館職員との処遇格差がますます拡大しつつあるのも近年の特徴であります。図書館の高度化に見合う人材の確保・養成の必要性は充分認識していても、独自に研修機会を設定することは容易なことではありません。これらは、小規模図書館共通の悩みでもあります。しかしながら、高度情報化社会における大学図書館の責務と社会的要請を考えますと、小規模館は小規模館なりの対応が迫られております。今回の改組計画も図書館業務の効率化とサービスの向上を高め、利用者の多様なニーズや情報化社会の進展に即応できるような機能的運営体制を図りたいという図書館職員の願いを込めて提案

されたものであります。

改組の主な内容は、

- ① 電算化システムの運用面での安定性と充実度がかなり向上してきたこともあって、今後における同システムの企画・調整・管理運用業務を総務システム係に一元化したこと。
- ② 図書の受入・整理業務を和書及び洋書業務として専門別一元化することによって、電算処理能力の効率化を図ったこと。
- ③ 利用者の多様なニーズと情報システムの電子化に対応する機能的なサービスの向上を図るため、電子・レファレンス係を設置したこと。
- ④ 視聴覚設備、資料の利用サービスの向上及び視聴覚電子化教育の充実を図るため、視聴覚メディア係に再編・強化したこと。など

かといって、単に事務部門の改組と職員の自己啓発のみで高度発信型の電子図書館化に向けられた多くの課題が解決されるわけではありませんが、こうした私たち図書館職員のささやかな試みが学内の共通理解や全学的な論議に発展し、新しい図書館ビジョンの確立と研究支援体制の構築につながることを切望するものであります。



本学所蔵貴重図書

『百二十老人語録』について

地域文化学科アジア I 講座教授 橋本 勝

中国の最後の王朝である清朝を建てたのは満州族であり彼らが中国の征服王朝の殿の役をつとめた。清朝皇帝の一人乾隆帝の時代に随分多くの満州語文献が出版された。併しながらその殆んどは漢文献からの翻訳であった。満州族の母語である満州語は漢語（中国語）とは全く系統を異にする言語でありモンゴル語やチュルク語（広義のトルコ語）と共に所謂アルタイ語族を形成する言語である。満州語を表記する文字は満州文字であるが、この文字はモンゴル文字を借用しそれをもとにして清朝時代につくられたものである。

『百二十老人語録』と言うのは、乾隆時代の満州族の日常生活の実態を描写した文献でありこの種の書物の稀少性故に極めて貴重な記録と言えよう。又この書物は漢文献からの

翻訳ではなく元来満州語で書かれたものなのである。著者はスングンであった。乾隆 50 年代に書き下されたとされる。その漢訳は嘉慶 14 年にフジュンによってなされたと言う。当時の老人から採話した形式で百二十話をあげている。満州語原文の書名は "Emu tanggû orin sakda-i gisun-i sarkiyān bithe" である。海外ではサンクトペテルブルグのアジア諸民族研究所、北京図書館等に満漢合璧の写本が一部あり台湾の中央研究院図書館に漢訳本があると言われる。我が国では本学図書館に所蔵されている満州語の写本が一部あるのみである。本学は石濱文庫を含めて可成り多くの満州語文献を所蔵するが、本書は中でも出色のものであり本学が誇る貴重な珠玉と言えよう。



マールバッハのシラー図書館

地域文化学科ヨーロッパⅡ講座助教授 山元孝郎

マールバッハは、バーデン・ヴュルテンベルク州の州都であるシュトゥットガルトから郊外電車で三十分程のところにある小さな町である。電車を降りて十分程歩くと旧市街の坂道になる。その坂道のとっつきところにフリードリッヒ・シラーの生まれた家があり、現在シラー・ハウスとして公開されている。ごく普通のドイツ家屋であるが、シラーの一家が生活していたのは、一階部分の半分の区画であり、軍医を父としていたシラーが育った環境が必ずしも裕福なものではなかったことがうかがわれる。観光バスの到着時を除いては、シラー・ハウスを見学する人もそう多くはないようで、ドアのところまで太った黒い猫がよく日向ぼっこをしていた。

旧市街を通り抜けた向こう側にある見晴らしの良い丘の上にシラー博物館とシラー図書館がある。シラー図書館は、元来作家の原稿、手紙を収集、整理する研究機関として発足したとのことであるが、施設の拡充とともにドイツ文学研究に携わる人間を受け入れてくれる研究図書館としての機能が整備された。つまりこの図書館は、誰かが「あのう、私はシラーの美学の勉強をしたいのですが、日本では資料がなかなか手に入らないし、研究書も絶版になっていることが多いので、この図書館で仕事をしたいのです。」と遠方から訪ねて行くと「それはそれは遠いところをよく来ていただきました。どうぞ存分に研究なさってください。ゲストハウスの部屋がちょうど一つ空いていますから泊まってもらって構いません。この登録カードを見せれば隣にあるシラー博物館も入場無料だし、公園の中のレストランも割引になります。さあ、では本の探し方をお教えします。」といったような調子で歓迎してくれる、誠に親切な図書館なのである。そこにあるのは、ドイツ語で書かれ

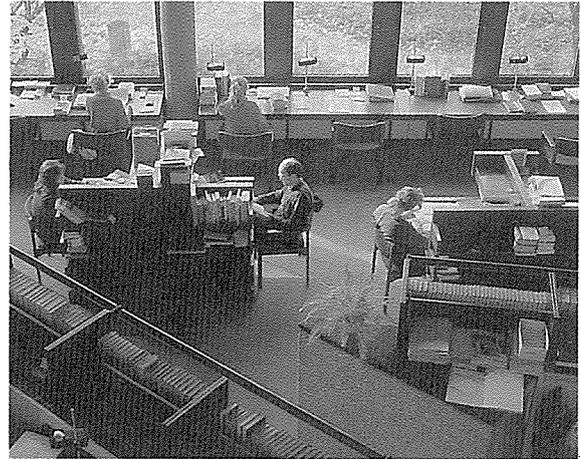
た文学作品は普遍的な文化財であって、世界各国のドイツ文学研究者はドイツ文学という大きな木になっている木の実をついばんで世界各国に持ち帰ってくれる益鳥の一種であるからこれを大事にしてあげようという理念であろう。人様からあまり大事にもらったことのないぼくのような人間にとっては、このような図書館での勉強生活は大変幸福なものであった。

この図書館のシステムは研究者＝遠来の客を迎えることを基本としている。ゲストハウスには三十程の部屋があり、滞在期間は四週間を期限としていた。これも多く益鳥に入れ替わり立ち替わり来てもらおうという発想であろう。また、図書館内では各自に一つづつ机を割り当ててくれる。厚紙を三角にして立てたのに名前を書いて、これを机の上に置き、図書館滞在中は専用の机ということにしてよい。見たい本を検索カードで探して、番号、書名を書き写し、自分の名前を書いてカウンターに置いてある箱の中に入れ、二時間程勉強したのちにカウンターに行くと、希望した本が重ねて置いてあり、その上に小さな名札が乗っている。この本を持って自分の机に戻り、この図書館に滞在している期間中は、研究に用いる本を自分の机に置いておくのである。ゲストハウスの貸与といい、机の割り当てといい、ぼくには、このようなシステムが遠来の研究者に対する高度の信頼を前提とし、また人間性善説の上に構築されているように思われる。遠い所からマールバッハの地にやって来た研究者には出来得る限りの便宜を計ろう、この図書館を訪れる人は研究するために此処を訪れるのだから提供し得る施設は惜しみなく提供しようという理念が感じられる。シラー図書館でぼくが感じた心地良さは、この図書館が保持しているこのような来

訪者への信頼感に由来するものようだ。外来の人間に対する密かな警戒感といったものが少しもない場所で好きなだけ本を読むことが出来るとは、図書館とは地上のユートピアのような場所である。

また研究資料の収集も優れている。一般の大学図書館もたしかに相当量の文献を蔵しているのだが、見たい本が収蔵もれになっている場合が多い。例えばシラー図書館でゴットフリート・ケラーの『馬子にも衣装』という短編小説に関する資料を検索するならば、カード引き出し一段分の半分近くに渡ってこの一篇の作品のための資料を見出し得るのである。網羅的な資料整備のために徹底した努力が行われていることがうかがわれ、このような図書館を各国の研究者の利用に供しているドイツの文化政策の懐の深さを感じざるをえない。

マールバッハからは、ヘルマン・ヘッセの故郷であるカルフの町も程近い。また『車輪の下』に描かれたマウルブロン修道院も車で行けば小一時間である。ヘルダーリンやメーリケにゆかりの町も近い。かくてぼくは南ドイツ・シュヴァーベンの地に愛着するのである。



閲覧カウンターから

運用係

1. 図書館システムの自動化について

附属図書館では、図書館サービスの一貫として窓口利用の混雑解消と迅速な図書の貸出処理を図るため、図書館システムの自動化を推進して参りましたが、今年度から「自動入退館システム」及び「図書自動貸出装置」を導入致しました。

自動入退館システム

入口ゲートに設置されているカードリーダーポストという装置で利用者カードを読取り、登録された利用者である場合にのみゲートのロックを解除するという仕組みのものです。また、従来通り貸出処理をしていない資料を閲覧室内より持出そうとすると、警告音とともに出口ゲートをロックします。

このシステム導入により、不審者の入館を防ぐことができる等のメリットがあるのですが、入館の都度利用者カードが必要になるため、従来より若干面倒になります。ご協力のほどお願い致します。

<お願い>

自動入退館システムの導入に伴い、利用者の皆様には下記のようにご協力をお願い致します。

- ① 入館の際には、その都度利用者カードが必要となりますので、お手洗い・喫煙等で閲覧

室から出られる際には、必ず利用者カードを持って出て下さい。

- ② 利用者カードのバーコード面を汚さないようにして下さい。
- ③ 利用者カードを紛失した場合は、直ちにカウンターへ届けて下さい。
- ④ 登校時には、利用者カードの携行を心がけてください。

自動図書貸出装置

P S C (Patron Self Check)という装置により、3階開架一般図書及び2階開架一般図書の貸出処理を利用者の皆様自身で行える装置で、2階閲覧室に2台設置しています。

この装置の導入により下記のようなメリットが期待されます。

- ① 窓口の混雑緩和。
- ② 貸出処理の迅速化。
- ③ 軌道にのれば、授業期間中の窓口業務終了後及び土曜日の貸出処理を行うことが可能。

<お願い>

利用にあたっては、次の点に注意して下さい。

① 図書自動貸出装置は、利用者カードさえあれば、本人以外でも簡単に貸出処理ができます。従って利用者カードのより一層の自己管理が必要になります。利用者カードを紛失した場合には速やかにカウンターに届けて下さい。(紛失届提出以前に処理されたものについては、カード名義人の責任になりますので充分注意して下さい。)

② 書庫内の資料及び雑誌については、図書自動貸出装置による貸出はできませんので、従来通りカウンターで手続きして下さい。

③ 図書自動貸出装置の利用時間は、当分の間窓口業務を行っている時間内に限らせて頂きますのでご了承下さい。

2. コピー機の設置について

2階閲覧室内にコピー機を2台設置しました。利用者の利便性を図ったものですが、著作権法を理解のうえ、正しい利用をお願い致します。

3. 3階開架閲覧室の書架増設について

今夏、3階に一般図書の書架を増設しました。約4500冊分の増設で、図書の配列も右図のように変わりました。夏の休館あけに「この棚のここにあった本がないんですが!」と尋ねられたことがあります。それはこの増設による移動のためですが、それだけでなく本の位置は本の増減(「減」ということはめったにないのですが)によってかわります。本の配列は本に貼ってあるラベルの請求記号順に並べられています。大まかでいいですから、請求記号を頭に入れておいて頂きますと、このようなことは避けられるのですが。

ひと言!!

- # 2階カウンターは、午前中が空いています。こみいった相談・調査はできるだけ午前中に!
- # 図書館閲覧関係のお知らせは、図書館に掲示します。見落とさないで!

開架一般図書配置図(3階閲覧室)

(15) $\frac{413 - 469}{392.1 - 413}$	軍事・自然科学	(29) $\frac{979 - 997}{953.7 - 978}$	仏・西・伊・露文学・その他
(14) $\frac{388 - 392}{377 - 387}$	社会教育・民俗・民族学	(28) $\frac{948 - 953.7}{937 - 948}$	英米文学・独文学・仏文学
(13) $\frac{370 - 376}{364 - 369}$	労働問題・女性史・教育	(27) $\frac{933 - 936}{930.29 - 933}$	英米文学
(12) $\frac{361.1 - 364}{334.5 - 361.1}$	財政・社会学	(26) $\frac{929.36 - 930.28}{921 - 929.35}$	中国文学・東洋文学・英米文学
(11) $\frac{332.22 - 334.4}{330.8 - 332.22}$	経済史・経済事情・人口・移民	(25) $\frac{918.6 - 921}{918 - 918.6}$	日本文学(全集)・中国文学
(10) $\frac{323.9 - 330.8}{319.21 - 323.9}$	外交・法律・経済	(24) $\frac{918}{914 - 918}$	日本文学(全集)
(9) $\frac{315.34 - 319.2}{312 - 315.34}$	政治・外交	(23) $\frac{912.6 - 914}{910.8 - 912.6}$	日本文学
(8) $\frac{309 - 311.9}{302.28 - 309}$	社会思想・政治学	(22) $\frac{908.1 - 910.8}{908}$	文学全集(世界)・日本文学
(7) $\frac{293 - 302.28}{253.02 - 293}$	中南米史・伝記・地理	(21) $\frac{870 - 907}{830.8 - 869}$	諸外国語学・文学
(6) $\frac{232 - 253}{222.06 - 232}$	東洋史・西洋史	(20) $\frac{828 - 830.8}{810.7 - 827}$	日本語・中国語・英語
(5) $\frac{210.6 - 222.06}{210 - 210.6}$	日本史・東洋史	(19) $\frac{804 - 810.7}{801.1 - 804}$	言語学・日本語
(4) $\frac{202.5 - 209}{180.21 - 202.5}$	宗教・歴史・文化史	(18) $\frac{779 - 801.09}{760.28 - 779}$	音楽・演劇・言語学
(3) $\frac{143 - 180.2}{134.9 - 142}$	西洋哲学・心理学・宗教	(17) $\frac{701.1 - 760.28}{611.3 - 701.1}$	産業・美術
(2) $\frac{130 - 134.8}{116 - 129}$	哲学・東洋思想・西洋哲学	(16) $\frac{519.2 - 611.2}{470 - 519.2}$	植物学・工学・農業
(1) $\frac{081 - 116}{000 - 081}$	図書館・新聞・叢書・全集		

書架番号

図書の分類

図書館について思うこと

地域文化学科ヨーロッパⅢ講座助教授 安生 恭子

今回、図書館報に寄せて、一寸私が図書館について思うことについて寄稿させて頂くことになりました。学生の皆さんには、図書館というと、開放的でなくネクラ、やっとな解放された受験勉強の場、等と若干マイナスイメージが付きまとっている気がします。いかがでしょうか。もし、そうだとしたら、それは、小学校時代から図書館が上からの教育が施される場の一つという経験が強く、下から学習を求めて行ったときに行き着く場という経験が少ないことによるのでしょうか。

そこで、少しでも図書館が学生の皆さんの身近になり、皆さんがよりよくその効用を引き出せるために、私の学生時代を通じたこれまでの図書館の利用方法について述べたいと思います。

第一に、コミュニケーションサロンとしての図書館の利用があります。すなわち、古くは貴族のサロン（客間）に人々が集まり、文学のことを話し合ったり、音楽を聴いたり、絵画を鑑賞したり等、文化活動を行っていましたが、このようなサロンのように、図書館に来て、他の人と接し、情報の交換をすることです。ここで情報の交換とは、書物と人との間、図書館員と利用者との間、利用者同士です。一般に、図書館の利用はレポートや論文の準備段階として資料収集・閲覧や研究・調査・自習を行うためでしょうから、まず、書物と人との間の情報交換が行われます。そして、その前提として、図書・資料と利用者との間を媒介する図書館員との情報交換が行われ、これらが図書館利用の中心となるのは当然でしょう。しかし、それだけではまだ三分の二に過ぎないと思います。残る三分の一は、利用者間の情報交換です。例えば、学部の初期の段階では、授業の予習・試験勉強などのために図書館を利用したり、自主ゼミの発表

に先立ち友達同士で資料収集に行ったりすることがあります。そのような活動をきっかけにして、他の利用者との交流が生まれ、興味関心を共通にする新しい友達の和を広げることができるのです。サークルに入るのも一つの方法ですが、意外に図書館の利用がきっかけで、友達ができるものです。

第二に、情報へのアクセス方法を訓練する場としての図書館の利用があります。学生の皆さんの中には、民間企業に就職する人、官公庁に就職する人、大学院に進学する人等、様々だと思いますが、いずれの進路に進んでも、自分の知らない問題に遭遇し、限られた時間内に、その問題を自分自身で解決しなければなりません。情報の氾濫する時代において、知識そのものを何でも知っておこうという考えには無理があるでしょう。したがって、最も要求されるのは、当該問題を解決するためにはどういう情報が必要で（情報自体が答えになる場合も、さらに答えを出すための基礎・判断資料としての情報が必要な場合もあります。）、その情報はどこに行けば入手できるかを知っていることです。高度情報化時代を生き抜く必須の処世術とでも言うべきでしょうか。殊に、パソコンを利用してどう情報収集するかが重要になっています。

第三に、無限の知的数珠繋ぎの遊び場としての図書館の利用があります。何げなく興味本位で借りた本に、参考文献の紹介があり、さらにそれをたどればその参考文献があり、その文献を読んだところ、またまた別の興味が湧いてくるという経験をしたことはないでしょうか。例えば、フランスでのドレフュス事件はどうして起こったか→ユダヤ人とは何ものぞ→ユダヤ人の歴史は→ではユダヤ教とは→それを迫害したキリスト教とは…と、関心は無限に波及します。何とも無限のジグソ

一パズルを組み立てるような終わりの無い末広りの道楽です。

以上が、私のこれまでの図書館の利用方法です。詰まるところ、ヒュームとカントの論文をまとめるために朝 9 時から夕方 6 時まで、国立図書館の椅子に“釘付け”になった

フランスの文学者ボーボワールのようになれるということではありません。また、その必要も無いでしょう。それよりも、在学中に自分なりの図書館の利用方法を発見して下さい。ただ、せめて、文献・資料の検索方法くらいはマスターするように致しましょう。

時間を翔び立つ翼

国際文化学科日本語講座助教授 筒井佐代

宙を舞うようなカメラの動きがとらえる巨大な図書館は、男の、女の、若者の、老人の、絶え間なく流れ出し、重なり合い、絡まり合っては消えてゆく「声」に満ちあふれていた——ヴィム・ヴェンダース監督の映画「ベルリン・天使の詩」の中に出てくる国立図書館は、まるで天井の高い大聖堂を思わせるような壮大な空間である。そこに響き合う声は、しずかに本を読んでいる人たちが心の中で朗読するテキストであり、その声の混沌に身を浸しているのが、人間には姿の見えない天使たちである。歴史も時間も命も持たない天使たちにとって、人間の物語の詰まった図書館は安らぎの場としてある。

本というものは、それがどんな内容のものであれ、一つの世界＝物語をなしている。その世界にもぐり込み身を浸し、自分の知識や過去の経験、その日の気分や状況などのコンテキストと絡め合わせながらテキストの中をさまよい、本の装丁や紙の手触りを楽しむ行為。本を読むことはそのつど一回限りの行為であり、同じ本を二度読んだとしても、その二回の行為は同じものではありえない。紙に印刷されたテキストは、変化しない閉じたテキストであるが、次にそのテキストに出会うまでに読み手は変容し続けている。過去に読んだ本を改めて読んだときの新たな発見は、それが自己の変容の発見でもあるからこそ、感動となりうるのである。

読み手と世界との、ひいては書き手とのインタラクティブな関わり合いを許すハイパーテキストとしての物語は、どこからでも読み始められ、遠く離れた断片に瞬時に飛ぶことも可能であり、キーワードを追いかけてさまようこともできる。読み手の選択によって、時間の流れもときに逆流し渦巻き、世界の断片はそのつどそのつど編み直され、そのプロセスが物語に仕立て上げられてゆく。オープンなテキストを読む感動とは、物語の作成に加われる楽しみと、できあがった物語の一回性なのかもしれない。図書館の中で人間の内声に耳を傾ける天使のように、時間の流れに縛られずに物語の断片をパズルのように組み合わせ楽しむこと。これからの新しい読む行為とは、天使になれるよろこびなのだろうか？

しかし、生物としての自分は、あくまでも時間に縛られながら編集不可能な歴史を生きている。歴史をもたない天使にとっては、時の流れの中で日々の生活を営み、笑い苦しみ、やがて死にゆく存在がまったくの他者であるからこそ、歴史を読む人の声に耳を傾けたくなるのではないのか。流れを操作することを許すテキストの魅力の対極に、誰にも編集しえない物語＝歴史としてのテキストの力というものが存在する。そのような力をはらむテキストこそが伝えられるべき物語としてあるのだという、時間を生きている人間の思考

さえも、もはや切り刻まれ編集されてゆく対象でしかなくなりつつある。

図書館が天使になろうとする人間の集う場となり、それぞれがディスプレイと向かい合

い、マウスをクリックする音が響きわたる。そんな妄想がリアルな手触りを帯びつつあるとき、自分の居場所はどこにあるのだろうと、ふと思う。

図書館が「狭く」なっています！

図書館増改築検討作業部会

外大が移転して18年が経過し、図書館のあらゆる部分が手狭になってきています。現在の図書館の蔵書冊数は53万冊を超えています。しかし、図書館の収容可能冊数は約40万冊です。年間1万3～4千冊の図書が増え続けているので、移転当初（昭和54年・1979年）の蔵書冊数（約30万冊）に加えると既に収容可能冊数をオーバーしているのです。さらに図書館では図書だけでなく雑誌・紀要・新聞の類いも増えているので、これらの資料が書庫や書架からはみだし、図書館が機能不全に陥るのも時間の問題となりつつあります。

また、図書館の座席数も足りません。1階の自習室や2階のブラウジングルームの座席も加えても291座席しかなく、これは少なく見積もっても200席以上足りない状況です。試験期などは特に混雑はひどく、これもこの18年間で学生数で1500人以上、教員数で100人近くの増員があったことを考

えると当然といえば当然の状況です。

図書館では昨年10月から、この現状を解決するため「作業部会」を設けて検討を始めています。平成8年11月29日には施設課長に増改築の可能性を聞く機会をもちました。その際、施設課長から「図書館の要整備面積は1205㎡あり、増築の候補地として図書館隣接のバス停部分が最も適しているのではないか」という意見を伺いました。今年の2～3月にかけて最近増改築をおこなった図書館（九工大・東京農工大・富山大・岡山大）などに図書館職員が分担して出向き、現場を視察して資料集めを行いました。

このように図書館としては積極的に図書館の拡充・整備に向けて検討を重ねてきていますが、今後はより具体的な提案（図書館の増設・改修要求）をまとめる必要があります。みなさまの理解とご協力をお願いする次第です。



テープライブラリー・カウンターから 視聴覚資料係の仕事・・・

視聴覚資料係長 澤山輝彦

私は鉄道や自動車が大好きな子供だった。大人になると大きな声で鉄道好きとはいわなくなったが、その気は残っている。今でも鉄道を利用する時には、出来れば運転席のうしろに立ちたいと思っており、最近ではJR東西線でこれをやり、非常にうれしかったのだ。自動車は大人になってそれを持つことが出来る時になってあまりにも問題が多すぎることに気が付いてほとんど熱は冷めてしまった。

こんな鉄道少年が図書館職員になり、今は視聴覚資料係に配置され、所蔵資料の貸し出しを主な仕事として日を送るようになった。

そんな中で私をとらえた視聴覚資料＝ビデオがある。ルネ・クレマンの「鉄道の闘い」はそのひとつだ。対独レジスタンスに生命をかける人々に、はらはらしながらも、主役である鉄道車両の動きにみとれてしまうのだ。

「鉄道の白薔薇」も冒頭の事故のシーンにはショックを感じるが、古典的な蒸気機関車や客車を物語りぬきで見てしまう。

サイレント時代の小津作品「生まれてはみたけれど」には、郊外を走る電車が写る。どこか、何線だろうか、調べてはいないが、少年時代に乗った電車の音がするにちがいない。などと考えてしまう。最近購入したビデオ「世界の車窓から」は鉄道はもとより、各国の風景、人々の姿も親近感があり、楽しく嬉しい資料である。

自動車ではベルイマンの「野いちご」に1930年代の車だろう。重厚なのが出てくる。往年のパカードのようなラジエーターグリルが目につくが、北歐のものか、ドイツのものか残念ながら私には車名がわからない。

環境とか自然とかかわるようになってからは、また別の興味で見ている。「羊たちの沈

黙」にでてくるメンガタスズメが気になったし、「カッコーの巣の上で」というタイトルには、托卵という習性を持つカッコーに巣はないはずだが、とこだわって、その意味を知る事ができた。

視聴覚資料のビデオをこのように瑣末なことにこだわる見方は他人にすすめられるものではない。楽しく、息抜きに、知識や知恵を得るために、語学学習のためにと各人様々でいい。映像が物を言う時代だ。それぞれがその言い分をききとればいいのだ。

音楽資料もレコードやカセットテープからCDの時代になり、取り扱いが簡単になり音質もよくなって利用はふえた。現状は語学学習ブースで聴いているので、今後もう少し音楽鑑賞に適した環境を作ることにより、より資料利用が増えることと思う。

いま図書館視聴覚資料係は語学学習のためのLL教室の維持、管理を受け持っている。視聴覚資料係というよりLL係で通っているくらいだ。本学の語学教育のためLLが重要なことはいうまでもない。だが先に書いた視聴覚資料の運用とLLの世話の両方をやっていると、どちらの機能も最大限に発揮させていないのではないだろうか。この分化が図書館の中の視聴覚資料係の立場を明確にし、広範な資料収集、分類、多様な検索方法を取り入れるなど仕事はまだこれから積極的にやれる。

その時、私たちは、時々思う「おれたちはレンタル屋」かという思いから脱することができるのだ。

大型コレクションとは

整理係長 森 垣 啓 士

図書館から毎年4月に募集の案内をしている「大型コレクション」について簡単に説明しておきます。

大型コレクションとは「1セット当たりの購入価格が国内資料で100万円以上、外国資料で500万円以上の学術研究上緊急に必要な人文・社会科学系の一次資料で、学内での予算措置が困難なもの」を指します。昭和53年(1978年)から文部省が予算措置を行ない、全国の研究者に共同で利用してもらうよう位置づけられています。そのため、図書館に所蔵することや目録の作成・学術情報センター(NACSIS-CAT)へのデータ入力などが条件づけられています。

1997年9月現在で530件のコレクションが全国で所蔵され、本学ではこれまで7件採用されています。大型コレクションを調べるには『全国国立大学所蔵大型コレクション総合目録(昭和53年度～平成2年度)』(東京大学附属図書館編 平成3年11月発行)があり443件収録されていますが、全コレクションの最新情報はNACSIS-IRの「大型コレクションディレクトリ」で見ることができます。

外大の大型コレクション

外大の7件を採用順に概説します。

1979年度に入った『北欧民俗学・歴史関係コレクション』は、folkloreの文献学者として著名なMax Girsell博士が選定・蒐集した北欧関係の蔵書の一部で、北欧の民俗学、民話、文学、歴史、地理などの分野にわたる基本的雑誌(19タイトル)と図書約600冊からなります。

80年度は『L. A. ムラトリー編 イタリア史資料集成』(109冊)と『イタリア著

作家叢書』(258冊)で、前者は18世紀に活躍した文献学者ムラトリーが蒐集した500年以降1500年までのイタリア史に関する文献で、中世及びルネサンス期に関する基本的な資料集です。『イタリア作家叢書』はクロッチェ(B. Croce)の指導のもとに刊行された中世以降19世紀半ばまでのイタリア古典の集成です。

82年度の『ロシア・スラブ言語コレクション』は、旧東ドイツを代表する古書店ツェントラルアンティークアリアートが蒐集した共通スラブ語・スラブ比較言語学・東スラブ・西スラブ・南スラブの言語に関する、1700年代から現代までの代表的なテキストと研究書と雑誌(8タイトル)から成り、計1500冊のコレクションです。

83年度『インドネシア・コレクション』は1940～1970年代に出版されたインドネシア政治資料を主体とし、日本統治時代(1942-1945年)と革命期(1945-1949年)のパンフレット類や政府刊行物、インドネシア共産党の1945年以降の出版物が多いことが特徴です。オランダ王立民族学研究所の紀要「B i j d r a g e n」も含まれ総数1757点になります。

85年度『アラブ・イスラム・アフリカ言語文化コレクション』はアラブ・イスラム・アフリカ諸地域の言語・文学・歴史・宗教・人類学にわたる主要研究文献と最新の成果を網羅したもので、アラビア語・スワヒリ語の一次資料を含む1723点から成ります。

89年度『チュルク系諸言語コレクション』はチュルク系諸語、オスマン帝国期の言語・歴史、中央アジア・西アジアの諸言語・文化に関する文献を収集したコレクションです。

これら6件にはそれぞれのコレクションの冊子体目録が作成されています。

そして、95年度に『サハラ以南アフリカ言語文化コレクション』が加わりました。

サハラ以南アフリカ言語文化コレクション

96年3月に受け入れられたこのコレクションは3つの群からなっています。

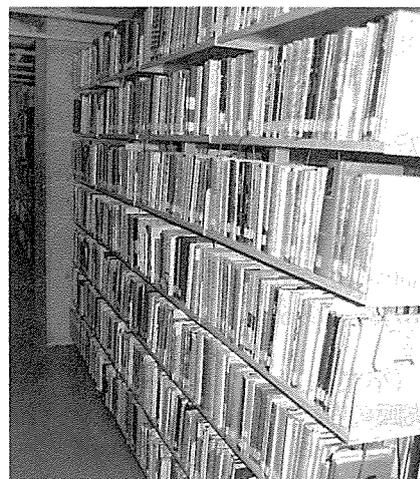
1つはアフリカで出版されたアフリカの言語・文学・文化について、主にアフリカの諸言語で書かれたものが主体です。この中にはスワヒリ文学を代表する作家の一人である Said A. Mohamed の *Dunia mti mkavu* やケニア最大民族ギクユの人々が伝える諺 1000 句を集めた *1000 Kikuyu proverbs with translations and English equivalents* などがあります。

2つ目は7つの研究叢書が中心で言語学・民族学の基本図書をそろえています。重要なものをあげてみると、チャドで話されているカネンブ語の音韻体系を記述した *Le Kanembou des Ngaldoukou* はフランス言語人類学会が出版する叢書の1冊で、カネンブ語についての貴重な資料です。ルオ語についての基本資料として *A grammar od Kenya Luo* があり、ナイルサハラ言語研究叢書のなかに入っています。東アフリカ言語研究叢書は東アフリカで話されていて未だ十分に研究されていない言語についての基本資料で構成され、ケニアとウガンダ国境で話されている消滅の危機にあるカリモジョン語の文法書 *A grammar of the Karimonjong language* などがあります。ケルン大学を中心としてアフリカ諸言語の研究成果を集成したケルン・アフリカ研究叢書の中の1冊 *Nilotic studies* は東アフリカで話されているナイル諸語の研究成果と歴史をしめすものです。マールブルグ・アフリカアジア文化叢書に含まれるアフリカ諸言語の研究書には、すでに死語になりかけている言語の記述もおさめられていて貴重なものとなっています。

3つ目はアフリカの言語分野のアメリカと

イギリスの学位論文257点です。そのなかから数点例示すると *Prefixes, sound change and subgrouping in the coastal Kenyan Bantu languages*、*Languages contact, language planning and language policy*、*Some morpho-syntactic aspects of bilingual code-switching strategy in Lesotho*、*Aspects of prosody in English and Swahili* などです。周知のようにアメリカの学位論文はUMIから出版され *Dissertation abstracts international* など調べることができます。イギリスの学位論文については *The Brits index* という参考図書があります。少し横道にそれますが本学にも所蔵されている *The Brits index* の紹介をしておきます。イギリスでは年間7000点以上の学位論文が受理されていますが、British Library ではイギリスの主要大学約50校の学位論文の原報を集めマイクロ化して保管を行い、1971年から1989年までの論文がこの *The Brits index* に収録されました。Author index、Subject index、Title index、1988 supplement、1989 supplementの全5巻からなり、各論文については著者、論題、受理大学、ページ数、受理年次、注文番号が記載されています。1989年以降の分が出版されていないのが残念ですが、2階参考書架に配架されていますのでご利用ください。

『サハラ以南アフリカ言語文化コレクション』は学術情報センターのNACSISを通して、すでに全国共同利用に供しています。



本学関係者からの寄贈図書一覧（平成7年4月～平成9年7月）

[順不同・敬称略]

- 伊藤太吾
ロマンス語比較会話／伊藤太吾著／大学書林，
1996
- 伊藤太吾
スペインの言語／伊藤太吾〔ほか〕著／同朋舎
出版，1996
- 塩谷茂樹
草原の国のむかし話，モンゴル／塩谷茂樹訳編
／能登印刷出版部，1995
- 亀井克之（卒業生）
パキスタンス戦略／ジャン・ピエール・ダニエル著，亀井
克之訳／関西大学出版部，1996
- 桑島昭
Sākṣāttkāra : Bihāra kē kisāna
nētā Paṇ. / Sho Kuwajima / Pratyak
ṣa Prakāśana , 1996
- 桑島昭
パキスタンのジャーナリストマス・ハルアリ・カーンさんを偲ぶ
／桑島昭編著／ナリ出版，1997
- 原田武
プルストと同性愛の世界／原田武著／せりか書
房，1996
- 古賀勝郎
日本語-ヒンディ語辞典／古賀勝郎著／古賀勝
郎，1996
- 高田博行
ハンドブック現代ドイツ文法の解説／E.ハンフェル，H.
ヴァイト著，西本美彦，高田博行，河崎靖共訳
／同学社，1994
- 市川明
ドイツ語ステップアップ，参考書+問題集／市川明，
木村英二，H.-J.ピピン著／郁文堂，1996
- 志水彰（元教授）
臨床精神医学／西村健，志水彰，武田雅俊編
集／南山堂，1996
- 松岡環（卒業生）
アジア映画の都，香港～インド・ムンバイ～ロード／松
岡環著／めこん，1997
- 松野明久
インドネシアのポピュラー・カルチャー／松野明久編／めこ
ん，1995
- 松野明久
インドネシア労働レポート，検証経済成長と労働者／
D.R.Harris 編，松野明久監訳／日本評論社，
1996
- 上野義和（元教授）
古英語の世界へ，モルトンの戦い／上野義和編
著，平井美津子〔ほか〕編集／松柏社，1997
- 是永駿
チャイ・プリズン，中国獄中見聞録／劉青著，是
永駿訳／凱風社，1997
- 是永駿
波動／北島著，是永駿訳／書肆山田，1994（り
ぶるどるしおる16）
- 是永駿
現代中国詩集／財部鳥子，是永駿，浅見洋二
訳編／思潮社，1996（海外詩文庫7）
- 正木恒夫
植民地幻想，イタリヤ文学と非ヨーロッパ／正木恒
夫著／みすず書房，1995
- 西村成雄
張学良，日中の覇権と「満州」／西村成雄著／
岩波書店，1996（現代アジアの肖像3）
- 石田修一
ロシア語の歴史／G.O.ウイナル著，石田修一訳
編／吾妻書房，1996
- 赤木攻
タイ，工業化と地域社会の変動／北原淳，赤木
攻編／法律文化社，1995
- 赤木攻
State of Thai studies in Japan / edited by
Kitahara, Atsushi and Akagi, Osamu / The
Thai Seminar of Japan, 1996
- 染田秀藤
アジア文化を学ぶ人のために／友枝啓泰，染
田秀藤編／世界思想社，1997

染田秀藤

大航海時代における異文化理解と他者認識、
スペイン語文書を読む／染田秀藤著／溪水社、
1995

染田秀藤

インテは人間か／ラス・カス[著]、染田秀藤訳／
岩波書店、1995 (アンロジ-新世界の挑戦 8)

染田秀藤

アルバ先生を偲ぶ、英知大学イスパニア文学科創
設 30 周年記念／英知大学西文科 30 年の会編
／英知大学西文科 30 年の会、1995

早稲田みか

書物の喜劇／ラト=ウ=グ=イ=シュウ=ア=ン著、早
稲田みか訳／筑摩書房、1995

大河内康憲 (名誉教授)

清高／陸文夫著、大河内康憲編／朝日出版社、
1996

大河内康憲 (名誉教授)

中国語学論文集、大河内康憲教授退官記念／
大河内康憲教授退官記念論文集刊行会編／東
方書店、1997

大河内康憲 (名誉教授)

中国語の諸相／大河内康憲著／白帝社、1997

大上正直

鱈の涙／アト・V・ヘルナンデス著、蜂谷純子訳、
大上正直監修／大同生命国際文化基金、1997
(アジアの現代文芸 Philippines (フィリピン) :1)

池田正隆 (卒業生)

ビルマ仏教、その歴史と儀礼・信仰／池田正隆
著／法蔵館、1995

中岡省治

中級スペイン文法／山田善郎[ほか]著／白水社、
1995

中川紀子 (卒業生)

香港電影的広東語、香港映画で学ぶ広東語、
名作・名シーン名セリフ集、広東語/日本語対訳／
陳敏儀著／キネ旬報社、1995

田尻雅士

Sententiae. 水鳥喜喬教授還暦記念論文集／
菊池清明、市川雅雄、田尻雅士編／北斗書房、
1995

田中仁

王明著作目録／田中仁編著／汲古書院、1996

田中泰子

ゆき／T.マウリ絵、Yu.コウアリ文、田中泰子
訳／ブック・グローヴ社、1995

南田みどり

ミャンマ-現代短編集／南田みどり編訳／大同生
命国際文化基金、1995 (アジアの現代文芸
Myanmar (ミャンマ-) :3)

梅津和郎 (名誉教授)

ロシア天然ガス産業の経営構造／梅津和郎著／晃
洋書房、1997 (名古屋学院大学産業科学研究
所叢書 15)

梅津和郎 (名誉教授)

アジア太平洋共同体、ASEAN, APEC, NAFTA
／梅津和郎編著／晃洋書房、1996

八尾隆生

大清実録中東南亜関係記事嘉慶(全)、自嘉慶
元年正月至嘉慶二／八尾隆生編／東南アジア史
学会関西例会《漢籍を読む会》、1986

八尾隆生

乾隆／桃木至朗編／東南アジア史学会関西例会
《漢籍を読む会》、1984 (大清実録中東南亜
関係記事 1-5)

八尾隆生

東南アジア史の中の「中央」と「地方」／吉川利治
[ほか]編／大阪外国語大学西日本地区東南ア
ジア史研究会、1997

北川四郎 (卒業生)

シベリア出兵から戦後 50 年へ／北川四郎著／御
園書房 (発売：論創社)、1995

末永敏子 (卒業生)

ハルカレわが町、日本女性八人の暮らし術／末
永敏子著／PMC出版、1993

脇田晴子 (元教授)

中世に生きる女たち／脇田晴子著／岩波書
店、1995 (岩波新書 新赤版 377)

松本洋子 (卒業生)

病院で困らないための中国語／王燕玲、松本
洋子編著／サトル、1997



◆編集後記◆

○図書館報の再々刊号(第9号=通号13号)を発行することが出来ました。1979年に箕面市に移転後18年を経過しましたが、図書館を取り巻く状況は、時の流れ以上のドラマティックな変化をもたらしてきています。特に「電子図書館化」に象徴されるような情報技術に対応した新しい図書館への模索も始まっています。移転当時から本学図書館では先駆的なBDSの導入や、図書館の電算化を行ってきましたが、今や、さらなるサービスの向上に対応する図書館システムの再構築にせまられています。

○図書館の理念と今後の運営問題が山積してありますが、特に「開かれた図書館」を志向するためには、利用者の要望には全て耳を傾けようとする気概が図書館総体に必要となります。ただ行政機関の枠組の中でしか出来ない限界もありますが、そんな中でも少しでも有

効な手だてだけは発揮出来るはずで

○私達図書館職員の資質の向上も必要になってきます。日常の業務の中で、利用者と接し資料と接して、自己を磨いていくことに尽きるのですが・・・

○「図書館」を理解してもらう努力も又、必要です。そのためにも今回のLibrary Informationの発行等により、大学当局、利用者みなさんにいささかでも〈図書館〉業務の重要性を理解してもらえものと思っています。年間2回の発行予定で無理をせず継続的な発行を旨したいと思います。

○表紙は、移転当時の周りにはまだ何もない図書館外観写真で、上記の写真は現在の図書館です。図書館自体も、もう一度移転当時の原点を振り返りながら、新たなる図書館に向けて飛躍させたいと願っているのです。

(専門員 岸本晴広)

大阪外国語大学附属図書館報《Library Information》 第9号

1997年10月20日発行

発行 大阪外国語大学附属図書館 〒562 大阪府箕面市粟生間谷東8-1-1

電話0727-30-5111 (代表)